

「シロアムの池」

ヨハネの福音書 9:1~41

はじめに

今日の内容はイエシュアが生まれつきの盲人を、不思議な方法で癒される出来事が描かれています。イエシュアの行動と言動、記されている一つひとつの記述にはすべて意味があります。結果的にここに登場する盲人は目が見えるようになる、癒されるわけですが、その理由は、この人が良い人だったからとか、イエシュアが憐れみ深いお方だから、だとかいう類のものではないことを最初に述べておきます。

1. 盲目

9:1 またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。

前回までの 8 章に描かれていた内容は、ユダヤ人たちのかたくなさ、イエシュアの言葉を理解できない、受け入れられない、捉えられない姿でした。それはまさに生まれつきの盲人にたとえることができます。文脈的に考えるならば、ここに描かれている盲人は、ユダヤ人たちのかたくなさを表した型であると考えられます。しかしこの盲人が盲目に生まれついた、生まれながらの盲人であるその原因は、この盲人のせいではありません。この人が悪いわけでも、この人の両親が悪いわけでもなく、神様がこの人を盲目に生まれさせたのです。それと同じように、ユダヤ人たちがイエシュアを信じられない、受け入れられないという、そのかたくなさは、神様がユダヤ人たちをそのようにさせたということが言えます。ではなぜ、そのようにされたのでしょうか。

9:2 弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」

9:3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」

ユダヤ人たちがイエシュアの言葉に対して盲目、すなわちかたくなにされたのは、「神のわざ」すなわち神様のご計画である御国の完成が「この人」すなわち彼らイスラエル、ユダヤ人たちに現れるためであることをイエシュアは示しておられると考えられます。つまりイエシュアは、この「生まれつきの盲人」を通して、これから表される奇蹟の中に、神様のご計画がどのようなものであるかを示そうとしておられるのです。ですからそのような視点で、ここに描かれている出来事を見つめ、思いめぐらす必要があります。

ちなみに、「盲目にされる」ことを、ヘブル語でアーヴァル(אָוַר)と言います。このアーヴァルが初めて使われるのが、出エジプト記 23:8 です。

出エジプト記

23:8 わいろを取ってはならない。わいろは聡明な人を盲目にし、正しい人の言い分をゆがめるからである。

このように、盲目にする、アーヴァルとは「正しい人の言い分をゆがめる」ことであることが解ります。正しい人、それはまさにイエシュアです。その言葉をゆがめること、偽りとするのが盲目であるということだと言うことができます。

9:4 わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行わなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。

9:5 わたしが世にいる間、わたしは世の光です。」

イエシュアはまず、昼と夜にたとえて神様のご計画について説明されます。昼と夜、ヘブル語で昼はヨーム (יום)、夜はライラー(לילה)です。これらが最初に使われるのは創世記 1:5 です。

創世記

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

1:5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

このように、昼は光のことであり、夜はやみのことであることが解ります。神様はこの光とやみ、昼と夜を区別、すなわち分けられました。これが「第一日」、つまり神様のご計画の「第一」目的、最も重要な出来事であり、それはご自身を指して光と言われたイエシュアと、イエシュアを受け入れない、属さないものを分ける、すなわちさばくことを第一目的としていることが示されていると考えられます。

私たちは今、時間という制約の中で生きていますので、時間の概念で物事を考えてしまいます。ですからこの箇所を読むと「昼が終わって夜が来る」という捉え方をしていますが、神様は光とやみとを区別する、分ける、さばくことが目的なのです。ですから夜が来る前に、昼のうちに急いで働きなさいと言われていたのではなく、昼すなわち光とは、イエシュアとともにイエシュアを遣わした方、すなわち御父のわざを行う場所を指し、それは神の国、御国であると考えられます。そして夜すなわちやみは「だれも働くことのできない」世界、一遍の光も差し込まない、一般的に地獄と呼ばれる滅びの世界、まさに盲目の世界を指していると考えられます。

2. つばきと泥

9:6 イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。

ここからイエシュアの不思議な行動が始まります。まずイエシュアは地面につばきをかけられます。つばきをかける、「つばを吐く」ことをヘブル語でヤーラク(קרק)と言います。この言葉が初めて使われる箇所は民数記 12:14 です。

民数記

12:14 しかし主はモーセに言われた。「彼女の父が、彼女の顔につばきしてさえ、彼女は七日間、恥をかかせられたことになるではないか。彼女を七日間、宿営の外に締め出しておかなければならない。その後に彼女

を連れ戻すことができる。」

この出来事は、モーセだけが選ばれ、神様に特別扱いを受けていると言って、神様に対して不満を抱き、呟いた彼の姉であるミリヤムが、神様の怒りに触れてツアラアトにかかる場面です。モーセは、彼女のためにとりなしますが、それに対して神様が語られた時にこのヤーラクが使われています。このように、ヤーラクには、「父が娘に恥をかかせる」、辱める、冒瀆する、名誉を汚すという概念があります。またそれは「七日間」という期間が付け加えられていることが解ります。ここに、イスラエルに対する神様のご計画の一旦を見ることが出来ます。つまり御父である神様が、その娘であるイスラエルの民（聖書の中でイスラエルはたびたび娘、おとめなどと呼ばれます）に、恥を与えるということが示されていると考えられ、またその期間は七日間であるということです。ヘブル語で「日」は「年」とも訳すことができますので、「七日間」は「七年間」とも解釈できます。イスラエル、ユダヤ人たちが受ける七年間の恥、痛み、苦しみ、とは、イエシュアが地上に再臨される前の最後の七年間、「大患難時代」を指していると考えられます。

またイエシュアはヤーラク、つばきを吐くことで泥を作られました。そしてその泥を盲人の目に塗られました。ですからこの泥もまた、重要な意味があると考えられます。泥はヘブル語でティート(טִיט)と言い、サムエルⅡ 22:43 で初めて使われています。

サムエルⅡ

22:43 私は、彼らを地のちりのように打ち砕き、道のどろのように、粉々に砕いて踏みつけた。

これはサムエル記Ⅱの22章に記された、ダビデが歌った歌の一節ですが、

サムエルⅡ

22:1 主が、ダビデのすべての敵の手、特にサウルの手から彼を救い出された日に、ダビデはこの歌のことばを主に歌った。

という状況で歌われた歌です。「ダビデの敵…特にサウルの手」と記されています。サウルはダビデと同じイスラエルの民、ユダヤ人です。しかもかたくなに神様に聞き従おうとしなかったイスラエルの代表的な王です。それをティート、泥のように「粉々に砕いて踏みつけた」ことが記されています。つまりティートには、「ユダヤ人を砕く」そのかたくなな心を砕いて、神様に立ち返らせるという、神様のご計画が示されており、その究極の現れが、先ほどのつばを吐く、ヤーラクが指し示した「大患難時代」であると考えられます。

このようにイエシュアが盲人の目につばきで作った泥を塗られたという行為の中に、終わりの時代にユダヤ人たちの身に起こる、神様のご計画である「大患難時代」が示されていると考えられます。

3. シロアム

9:7 「行って、シロアム(訳して言えば、遣わされた者)の池で洗いなさい。」そこで、彼は行って、洗った。

すると、見えるようになって、帰って行った。

シロアムとは、「遣わされた者」という意味ですが、旧約聖書ではシロアハ(שלח)と表記されています。

イザヤ書

8:6 「この民は、ゆるやかに流れるシロアハの水をないがしろにして、レツインとレマルヤの子を喜んでい

る。

この預言は、南ユダの王アハズの時代に、アラムの王レツインと北イスラエルの王ペカ（レマルヤの子）が、南ユダのエルサレムを攻めて来た時の話ですが、南ユダの民は見事にこれを撃退します。そこで彼らは自分たちの強さにうぬぼれ、「シロアハ」の水をないがしろにした、忘れてしまったということが記されています。ではこのシロアム、シロアハとは一体何を意味しているのでしょうか。

シロアハは、ヘブル語でシャーラハ(שלח)「遣わす、手を差し伸べる」という意味の動詞に由来します。このシャーラハが聖書で最初に使われるのは創世記 3:22 です。

創世記

3:22 神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」

この御言葉は、エデンの園においてアダムとエバが神様に背き、彼らの中に罪が入った時、罪を持ったまま「永遠に生きないように」と言われ、彼らを園から追放される時に語られた言葉です。ここで「手を伸ばし」と訳されているのがシャーラハです。そして、その手を伸ばすことによって得られるものが「永遠に生きること」であることが解ります。先ほどのイザヤ書の預言で言うならば、人は一時の喜びや快樂におぼれ、「永遠に生きる」ことを忘れてしまったと解釈することができます。

そしてシロアムとは、「遣わされた者」という意味であると記されていました。何かの結果や行動だけを指すのではなく、明らかに「者」として、これがある人格的存在であることを示しています。盲目的ユダヤ人の目を開けるのは、イエシュアではありません。シロアム、イエシュアとは別の存在ですが、イエシュアのように、御父から「遣わされた者」であることが、同じヨハネの福音書に記されています。

ヨハネ

15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかします。

ヨハネ

16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。

シロアム、遣わされた者の正体、それは「真理の御霊」です。御霊は「すべての真理に導き入れます」、それが盲人の目を開けることに表されていると考えられます。また旧約聖書ではこれを「恵みと哀願の霊」と呼んでいます。

ゼカリヤ

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、**恵みと哀願の霊**を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。

ユダヤ人たちは、その盲目さのゆえに、イエシュアを十字架につけて殺します。そのお方こそがメシアであったことに目が開かれます。それがシロアム、御父から、真理の御霊「恵みと哀願の霊」が注がれる、遣わされるゆえです。

4. 分裂

9:8 近所の人たちや、前に彼が物ごいをしていたのを見ていた人たちが言った。「これはすわって物ごいをしていた人ではないか。」

9:9 ほかの人は、「これはその人だ」と言い、またほかの人は、「そうではない。ただその人に似ているだけだ」と言った。当人は、「私がその人です」と言った。

ここにも創世記 1:5 に表されている神様のご計画のである分ける、区別する、さばくことが人々の「分裂」という形で表されています。イエシュアの御業、神様の御業が表される所には必ず「分裂」が起こります。分けること、区別すること、裁くことこそが神様のご計画の本質であるからです。

ルカ

12:51 あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、**分裂**です。

天と地、光とやみ、善と悪、そして救いと滅び、神様は聖書の中でしつこいほどにこの分裂、「分ける」ことについて語っておられ、それ以外ないと言っても過言ではありません。

9:10 そこで、彼らは言った。「それでは、あなたの目はどのようにしてあいたのですか。」

9:11 彼は答えた。「イエスという方が、泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池に行って洗いなさい』と私に言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。」

9:12 また彼らは彼に言った。「その人はどこにいるのですか。」彼は「私は知りません」と言った。

9:13 彼らは、前に盲目であったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。

9:14 ところで、イエスが泥を作って彼の目をあけられたのは、安息日であった。

人々はこの盲人が癒されたことを喜んでパリサイ人のもとへ連れて行ったものではありません。安息日に癒した、

治療した、医療行為をした、すなわち労働の罪を犯した事件が起こったとして、その犯人探しのために連行したのです。ユダヤ人に対する安息日という名の偶像の縛りが、5章のベテスダの池の出来事と同じく、このシロアムの池の出来事でも露呈します。

9:15 こういうわけでもう一度、パリサイ人も彼に、どのようにして見えるようになったかを尋ねた。彼は言った。「あの方が私の目に泥を塗ってくださって、私が洗いました。私はいま見えるのです。」

9:16 すると、パリサイ人の中のある人々が、「その人は神から出たのではない。安息日を守らないからだ」と言った。しかし、ほかの者は言った。「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができよう。」そして、彼らの間に、分裂が起こった。

またしても分裂です。これらの分裂現象は、人々が勝手に起こしているものでも、自然発生的に起こっているものでもありません。神様がご自分の計画を示すための型としての、神様の御業です。神様は人を「分ける」お方です。そしてこの分裂は、永遠であり絶対です。この区別の間には、深い淵のように、完全な隔りがあり、決して交わることがありません。目が見えるようになった盲人が、どれだけ説明しても、証言してもパリサイ人たちが信じなかったように、信じる者と信じない者は交わることができません。光とやみ、救いと滅びとは相反するもの、決してひとつになることはないのです。救いの完成である神の国と、滅びの究極である燃える火の池とは、完全に切り離された世界で、もはや永遠に交わることはありません。

9:17 そこで彼らはもう一度、盲人に言った。「あの方が目をあけてくれたことで、あの人を何だと思っているのか。」彼は言った。「あの方は預言者です。」

9:18 しかしユダヤ人たちは、目が見えるようになったこの人について、彼が盲目であったが見えるようになったということを信ぜず、ついにその両親を呼び出して、

9:19 尋ねて言った。「この人はあなたがたの息子で、生まれつき盲目だったとあなたがたが言っている人ですか。それでは、どうしていま見えるのですか。」

9:20 そこで両親は答えた。「私たちは、これが私たちの息子で、生まれつき盲目だったことを知っています。」

9:21 しかし、どのようにしていま見えるのかは知りません。また、だれがあれの目をあけたのか知りません。あれに聞いてください。あれはもうおとなです。自分のことは自分で話すでしょう。」

9:22 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者があれば、その者を会堂から追放すると決めていたからである。

9:23 そのため彼の両親は、「あれはもうおとなです。あれに聞いてください」と言ったのである。

盲人だった人は、自分が生まれつきの盲人であったこと、そしてそれが今は見えることを証言しました。そしてこの人の両親が同じ証言をしました。つまり「ふたりの証人の証言」です。しかしこの証言を、パリサイ人たちは認められないのです。

ヨハネ

8:17 あなたがたの律法にも、ふたりの証言は真実であると書かれています。

このように律法に記されているにも関わらず、信じられない、認めようとしません。このように、ここに描かれている出来事は 8章でイエシュアが語られた、イエシュアが御父から遣わされたメシアである、という御

父と御子の証言、つまり「ふたりの証言」を信じられない、認めようとしないユダヤ人のかたくなな姿を、もう一度繰り返して表していると考えられます。

このようにヨハネ 8 章と 9 章は、まったく別の出来事を通して、まったく同じメッセージを二度繰り返していると考えられます。

5. 見える

9:24 そこで彼らは、盲目であった人をもう一度呼び出して言った。「神に栄光を帰しなさい。私たちはあの人が罪人であることを知っているのだ。」

偽りの父である悪魔によって騙されている彼らには、イエシュアこそが偽りだと見えるのです。しかし盲人だった人は目が開かれて、一つのことが見えるようになった、「一つのこと」に気づいたことが次に記されています。

9:25 彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」

盲人であった人が知った「ただ一つのこと」、それは「自分が盲目であった」が「見える」ということ、つまり自分は盲目であった、大切なことが何も見えていなかった、知らなかった自分を「見た」、自分が盲目であったということに気づいた、ということを示していると考えられます。

6. 奇蹟

9:26 そこで彼らは言った。「あの人はおまえに何をしたのか。どのようにしてその目をあけたのか。」

9:27 彼は答えた。「もうお話ししたのですが、あなたがたは聞いてくれませんでした。なぜもう一度聞こうとするのです。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか。」

盲人の目を開ける、これは旧約のどんな預言者も現さなかった、神の御子メシアだけが成し得る御業、メシアの証しなのです。詩篇 146 篇にこう預言されています。

詩篇

146:6 主は天と地と海とその中のいっさいを造った方。とこしえまでも真実を守り、

146:7 しいたげられる者のためにさばきを行い、飢えた者にパンを与える方。主は捕らわれ人を解放される。

146:8 主は盲人の目をあけ、主はかがんでいる者を起こされる。

この預言を律法の専門家であるパリサイ人たちが知らないわけがありません。彼らもまた、いや彼らこそが盲人なのです。

9:28 彼らは彼をののしって言った。「おまえもあの者の弟子だ。しかし私たちはモーセの弟子だ。」

9:29 私たちは、神がモーセにお話しになったことは知っている。しかし、あの者については、どこから来

たのか知らないのだ。」

9:30 彼は答えて言った。「これは、驚きました。あなたがたは、あの方がどこから来られたのか、ご存じないと言う。しかし、あの方は私の目をおあけになったのです。

神様がモーセに与えた律法の専門家である彼らが、その律法の体現者であるイエシュアを理解できないというのは、本来あり得ない話なのです。たとえるなら、数学の博士が小学校 1 年の算数のテストで 0 点を取るような話なのです。ですからこれは驚くべきことであり、ある意味で奇蹟と言えます。つまりこれもまた神様の御業であり、ご計画の一部であると言えます。

7. 選び

9:31 神は、罪人の言うことはお聞きになりません。しかし、だれでも神を敬い、そのみこころを行うなら、神はその人の言うことを聞いてくださると、私たちは知っています。

9:32 盲目に生まれついた者の目をあけた者があるなどとは、昔から聞いたこともありません。

9:33 もしあの方が神から出ておられるのでなかったら、何もできないはずですよ。」

生まれつきの盲人の目を開ける方、神様を敬い、その御心を行う方、罪のない方、神から出ておられる方、盲人だったその人はイエシュアをそのように理解し受け入れました。

9:34 彼らは答えて言った。「おまえは全く罪の中に生まれていながら、私たちに教えるのか。」そして、彼を外に追い出した。

ここにもまた「分かれる」こと、分裂が描かれています。このように、真理の御霊によって目が開かれたイスラエル、ユダヤ人が、イエシュアをメシアとして受け入れるならば、たとえ「罪の中に生まれた」者であったとしても、その罪の中から「追い出される」すなわち分かたれ、もう二度と罪の中に戻ることはないということが示されていると考えられます。

そしてその分かたれた者を、イエシュアは決して見捨てません。イエシュアの方から探し求め、必ず見つけ出してご自分のもとに引き寄せ、集められます。そのことが「イエスは…彼を見つげ出し」という、次の節に示されています。

9:35 イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つげ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」

9:36 その人は答えた。「主よ。その方はどなたでしょうか。私がおの方を信じることができますように。」

9:37 イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれですよ。」

9:38 彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。

盲人だったその人は、イエシュアを人の子、メシアとして受け入れ信じました。この人がイエシュアを探して見つけたわけではありません。イエシュアがこの人を見つげ出し、そして信じさせたのです。

当時エルサレムだけでも多くの盲人がいたことでしょう。しかしこの人だけが選ばれ、癒された、目が開かれたのです。それは神様のご計画である「分ける」こととは、言い換えれば「選ぶ」ことだからです。ご自分の

民となる者を、まさに「選び分ける」ことが神様のご計画です。このように、人が信じて救われるとは、ただ神様の主権による選びだということができます。

9:39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」

ここでイエシュアは、はっきりとご自身の口から、「わたしはさばく」、分けると語っておられます。

9:40 パリサイ人の中でイエスとともにいた人々が、このことを聞いて、イエスに言った。「私たちも盲目なのですか。」

9:41 イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える』とっています。あなたがたの罪は残るのです。」

自分が盲人であることを認める、すなわち自分で自分を救うことができないこと、それができるお方はイエシュアだけであるということに気づくことが重要なのです。しかし、その気づきもまた、自分の力で得られるものではなく、神様から与えられるものです。つまり、すべては神様の主権による「選び分け」によるのです。私たちはよく「神様を信じる」というような言葉を口にします。その「神様を信じる」こととは、何でしょうか。それはつまり、神様の主権を畏れ、この「選び分け」の前に謙虚になることだと思われま。アブラハムが、イスラエルの民が「選び分け」られたことも、そして今私たちがここにいることも、すべて神様の「選び分け」のゆえなのです。すべては偶然ではなく必然なのです。